

『萬葉集』 遣新羅使人歌群—実録と脚色—

山崎 健司（熊本県立大学教授）

1-1 古代の日羅関係

日本の中学・高校では、古代日本の国際交流について、遣隋使・遣唐使ばかりを取りあげるけれども、韓半島との交流も国家間で行われていた。特に白村江の戦い（660年）で百済が滅亡した後、強大な勢力を誇る唐を意識して、日本と新羅は盛んに交流を行っている。『日本書紀』『続日本紀』の記事によれば、萬葉の時代、646～779年にかけて派遣された遣新羅使は27回（なお、遣新羅使派遣中止の記事が平安時代に入った後の799年にあり（『日本後紀』）、以後遣唐使の安否を問い合わせる使者を数回派遣）。だが、両国の関係は常に良好であったわけではない。735年には新羅が国号を「王城国」と改称したことを責め、来朝した使節を追い返し、翌736年には阿倍継麻呂を大使とする遣新羅使が派遣されるが、新羅は使者の旨を受け付けなかったという。また、753年には日本の遣唐副使大伴古麻呂が新羅の使者と席次を争う事件があり（『続日本紀』）、その年の遣新羅使も新羅王との謁見を果たせず（『三国史記』）、後に渤海国が興ると恵美押勝（藤原仲麻呂）により対渤海関係を重視しようとする動きも見られる。

1-2 萬葉集卷十五

「万葉集二十卷あるうち、読んで最も心の弾まない巻は、この巻第十五であろう」とは新編日本古典文学全集本『萬葉集』の言。家郷の妻を恋う歌や、やりきれぬ旅愁の歌ばかりが並ぶからである。その巻十五の前半は、前述した736年の遣新羅使の渡航記録だが、この歌群について、はやく大濱巖比古は「実録風な創作」と指摘（『萬葉集大成4』「卷十五」1955）、使者の歌の記録を入手した編者により脚色が加えられて現行の内容に至ったと一般に考えられている。ただし、使者たちの遺した記録と編者による脚色部分の認定を始めとして、この歌群には未解決な部分が多い。実録的と言われる部分においても、歌群中に多数を占める作者名を示さない無署名歌——その無署名歌における作者と記録者と編者をめぐって、諸説がある。歌群全体は編者によって統一されたひとつの作品として遺されていると見る立場もあるけれども、編者が使者の遺した生の声をどのように脚色したのか、萬葉集に示

された徴証から読み取ってみよう。

2 実録とみられる部分

全体145首からなる歌群のうち、経過地を題詞に明記する35首目（備後）から140首目（対馬）までの106首が通常、実録的と見なされている。

題詞に地名を掲げて統括された歌群の作者注記に注目すると、作者に関する情報をまったく持たない箇所があり、それらはすべて遣新羅使以外の第三者の手になる可能性も想定される。これに対し、作者に関する情報を一部にでも記載する歌群は、当事者の歌の記録を活かした実録的部分と見なされよう。一例を挙げると、「大島ノ鳴門ヲ過ギテ再宿（ふたよ）ヲ経テ後ニ、追作スル歌二首」の歌は、「これやこの名に負ふ鳴門の渦潮に玉藻刈るとふ海女娘子ども」（田辺秋庭）、「波の上に浮き寝せし宵あど思へか心がなしく夢（いめ）に見えつる」（無署名）というものだが、田辺秋庭の歌はこれがまあ、名にし負う鳴門の渦潮、その渦潮に棹さして玉藻を刈るといふ海女乙女たちなのか！、無署名の歌は上陸せずに波の上で浮き寝をした夜、どのように思っただらうか？という内容であって、題詞の「再宿」（二泊）に対応する内容を歌から読み取ることはできない。少なくともこの部分は歌も題詞も当事者によって書かれ、その記録がそのまま利用されていることを示している。（注）追作が「時間の上では、次の熊毛浦での歌よりのちの詠」（伊藤博『萬葉集積注』）であることがまず注意されるが、第一首の「コレヤコノ」が噂で知っていた事柄が眼前に現れた驚きを表す表現の型であるにもかかわらず「追作」とあることが問題になる。これについては、第二首が「なみのうへにうきねせしよひ」と上陸せずに二晩船中で仮泊した折の不安を踏まえて故郷の妻をうたっていることから、現地の情景を詠む第一首と望郷をうたう第二首とが組み合わせられていると考えられよう。恐らく、第一首は大島の鳴門を通過する際に作られ、後に第二首が作られる場面で通過地の珍しい情景を話題にしながら再度誦詠されたものと思われる。第一首から第二首へは土地の女性から家郷の妻へと連想が働いている。想像で補わねばならない部分を含むものの、この題詞は傍線部分など、当事者でなければ書けない内容なので、実録と見て誤らないと思われる。

3-1 脚色が施されたとみられる部分

では、編者が書き加えた「脚色」の内容とはどのようなものであったか。従来の研究ではあまり言及されない実録的とされる部分から、特徴的な例をとりあげ考え

てみよう。

「筑前ノ国志麻ノ郡ノ韓亭ニ到リ、舶泊シテ三日ヲ経ヌ。時ニ夜月ノ光皎々トシテ流照ス。タチマチニ此ノ華ニ対ヒ、旅情悽噓ス。各心緒ヲ陳ベ、聊カニ以テ裁ル歌六首」という題詞の傍線部「舶泊シテ三日ヲ経ヌ」は、六首の歌（引用略）から日数を導くことはできず、当事者でなければ知り得ない内容と言える。ところが、これに続く「時ニ夜月ノ光皎々トシテ流照ス。タチマチニ此ノ華ニ対ヒ、旅情悽噓ス」は、夜月の白々とした光をきっかけに旅情に悲しみ噓んだということ、此ノ華ニ対ヒとは月光の美しさに向き合っの意であるが、月光を詠むのは第四首・第五首のみである点に注意される。（なお、注釈書のうち、『私注』・『全注』はタチマチニとは訓まずヒサシクと訓み、第一首を題詞と関係づけて理解するが、第二・三・六首が月とは関わらず、此ノ華ニ対ヒの部分と対応しない。）用語の上で第三首と第六首が対応し、第三首から第六首までの四首は、大使と大判官が詠んだ前の二首を承けて作られている。「大君の遠の朝廷と思へれど」（ここは大君の治め給うお役所と思つてはみるけれど）と自らの公的な立場を意識しながら「け長くしあれば恋ひにけるかも」（旅にある月日が長いので、家が恋しくなってしまう）と望郷の念をうたつて見せた大使の第一首に対し、第二首は大判官が第一首の望郷の主題を、「旅にあれど夜は火ともしをる我を」旅の身でも、夜にはともし火のもとに居ることが出来る私なのにと即興的に、「闇にや妹が恋ひつつあるらむ」（暗闇の中で家の妻は私に恋い焦がれていることだろうか）と私的に展開させたもの。第三首以下の四首は第三・四首が「家に恋ひぬ日はなし」「家なる妹に逢ひて来（こ）ましを」と第二首に登場した家の妻への思いをうたつて、第一首からの望郷の主題を引き継ぎ、第五・六首が「海士のいざり（漁り火）」「沖つ白波」と、こちらは韓亭能許ノ浦の景を眺め現地の情景をうたいつつ、第六首では大使の第一首の「け長くしあれば」を承けて「あまた夜ぞ寝る」とうたい収める。六首はこのように即興的に見事な展開を示す。特に無署名の第三首以下は比較的身分の低い使人たちの歌だとすれば、その歌詠みの才能には並々ならぬものがあると言えよう。ただし、この見事な展開を押さえた上で注意したいのは、この歌会の最初から題詞に示す「月ノ光」が出ていたわけではなさそうだということ。第一首から第六首まで、時間の経過と共に歌い継がれていったとすれば、題詞に示されるように、月光の皎々と照るさまがきっかけとなつてうたい始められたものではなく、少なくとも第三首目までは月光に一同の関心は向けられていなかったと考えられる。とすると、この題詞は「舶泊シテ三日ヲ経ヌ」

のように当事者でなければ書けない内容をもつ一方、全体の歌の場には合致していないことになる。では何故、題詞は「月」を強調しているのだろうか？

3-2 「月」の強調

前後の歌群を見直してみると、佐婆の海中で逆風に遭い一夜に亘って漂流し豊前の分間浦到着後に詠まれた八首（三六四四～五一歌の引用略）の最後に月の歌が二首連続し、これに続いて「七夕ニ天漢ヲ仰ギ観ル」と題して、月や星を「妻を偲ぶよすが（抛り所）」と捉える歌が並ぶ。これについては具体的には、「年にありて一夜妹に逢ふ彦星も、我にまさりて思ふらめやも（一年のあいだ、待ち焦がれて、ただ一夜だけ妻に逢う彦星だって、この私より切ない思いをすることがあろうか）」（三六五七）、「夕月夜影立ち寄り合ひ、天の川漕ぐ船人を、見るがともしさ（夕月の光の中に、彦星と織姫の影が次第に近づき、天の川を船で漕ぎ進む彦星、ああその様子を見る、この羨ましさ）」（三六五八）などという歌である。一方、この後の「海辺ニシテ月ヲ望ミテ作ル歌九首」（三六五九～六七）では、「月を望みて」と言いながら望郷の歌ばかりが並び、月を詠んだ歌が全くないことが古来不審とされてきた。しかしながら、分間浦での歌群の最後に、先刻ふれた月の歌が二首連続した後、筑紫の館での望郷の歌四首をはさんで、七夕に月や星を詠む歌群に展開、そのようにして月の歌を持たずに題詞に「海辺にして月を望みて作る九首」と記す歌群へと続いていく構成は、この九首の歌群について「海辺で…一堂に集まって月見（望郷）の宴をしたのだが、月は目にし得ないまま、歌い継いだ」（『釈注』）と捉えるべきことを示唆していよう。思うに、前の七月七日の歌に対し、これは一五日の満月の夜のことではないか。遣新羅使たちは冒頭の家族との別れの場面で、秋の帰郷を約束して出発する。だが、時はすでに秋、しかもいまだ目的地・新羅にも到着しない。かかる状況のもと、家で待つ妻を偲ぶ抛り所となる月が満月となる十五日が、特に待ち望まれたのではなかろうか。一連の題詞には、帰郷について絶望的な状況に置かれた使者たちが家の妻を偲ぶ抛り所となる月を通し、悲劇性を浮かび上がらせる、そういう「脚色」が施されていると読むことができる。

4 作品への新たなアプローチ

以上、遣新羅使人歌群を取り上げ、当事者の遺した歌に対し、編者がどのように捉え「脚色」を施したかを述べた。「脚色」が読者を意識した営みであることは、言うまでもない。

題詞や左注に詳細な情報が記載される場合、我々は記載されている事柄の方に目を向けがちだが、ここでは注記の仕方に注目することによって作品の新しい解釈に迫ることができることを述べた。このような読み方は、複数の小歌群を統括して、より大きな歌群が形成される場合にも効力を発揮するはずで、例えば、大伴家持の「歌日記」などと言われている萬葉集の卷十七～二十などにも応用できよう。



祥明大學校天安キャンパスにて、本学短期研修団、および、
ホームステイファミリーの学生たちと
前列左から、金裕千先生、柳京子先生、山崎、丘副総長、
金尚珍先生、馬場、半藤、梁東國先生